

「居心地の佳いすまい」を設計し、  
持続可能な家づくりを考え、実践する。

菅家太建築設計事務所  
<https://kanketadashi.com>  
東京∞北海道

この冊子は、これまでの家づくりをとおして感じた疑問や問題を見つめ直し、  
これからの家づくりをどのように考えていったらよいかをテーマに、  
菅家太建築設計事務所が不定期に刊行する冊子です。

これからのすまい  
vol. 8

2021 年 10 月 発行

© 2021 TADASHI KANKE

写真：菅家太建築設計事務所（別途記載のあるものを除く）

表紙：<sup>あこ</sup>渡り腰構法でつくられた農家のすまい。  
（設計：丹呉明恭建築設計事務所 / 施工：ナカザワ建築）  
（埼玉県比企郡小川町）



これからのすまい

菅家太  
建築設計  
事務所

# 木にしたがって 家をつくるための哲学

文 丹呉明恭

## (一) 別の道

レイチェル・カーソンの「沈黙の春」が出版されたのは1962年、彼女の死の2年前です。この本は、1940年頃から大量に使われ始めた化学物質（殺虫剤）による自然界への影響と人間への被害を、多くの事例を示しながら告発したのですが、その力点は、人間への被害よりも、人間が便利に使い始めた化学物質が、多様な自然の多様なバランスをいかに崩すことになるのか、そのことにあります。人間の受ける被害はその一部として取り上げられています。生物学者であるカーソンの視点が、つねに動物や昆虫や植物の目からのものだったということが、たいへん大きな問題提起になっています。

『植物は、錯綜した生命の網の目の一つで、草木と土、草木同士、草木と動物との間には、それぞれ切っても切りはなせないつながりがある。』

その一例として、ロッキー山脈のふもとの高原に自生するセージブラッシュと、そこに棲息するブロングホーンというカモシカと、キジオリイチョウのもちつもたれつの関係が紹介されています。

『きびしい高原、セージブラッシュの群生が打ち続く紫色の荒地、キジオリイチョウ、身のこなしの速いカモシカ、みんな自然のままの完全なバランスを保っている。』

カーソンの目は、セージブラッシュ＝キジオリイチョウ＝カモシカという組み合わせに注がれています。そこには自然界のダイナミックな仕組み（関係）が成立しています。この沈黙の春の最終章「別の道」は、つぎのように始まります。

『私たちは、いまや分かれ道にいる。どちらの道を選ぶべきか、いまさら迷うまでもない。長いあいだ旅をしてき

た道は、すばらしい高速道路で、すごいスピードに酔うこともできるが、私たちはだまされているのだ。その行きつく先は、禍であり破滅だ。もう一つの道は、あまり《人も行かない》が、この分かれ道を行くときにこそ、私たちの住んでいるこの地球の安全を守る、最後の、唯一のチャンスがあるといえよう。』

カーソンの、この現代文明に対する強い拒否は、地球上に棲息する動物や植物の視点からのものにほかなりま

せん。「別の道」は人間の安全ではなく、地球の安全を守る道だということです。いったい彼女が求めた道とは、どんな道だったのずっと気にかかっていました。

「沈黙の春」  
レイチェル・カーソン  
1962年 新潮文庫

大工塾で行われた実大加力試験で試験体の寸法を確認する丹呉明恭さん。  
(栃木県小山市)



## （二）機械状系統流

わたしたち人間が、この地球上に棲息する生物の一つの種であることを疑うことはできません。この地球を前提にしなければ、わたしたちの生存はないのです。にもかかわらず、人間には地球の外に出て、そこから地球を俯瞰するように眺めることが可能であるために、地球を自分の対象として考えることができます。地球を自分たちの利用する対象と考える方向がそこから生じてきます。しかし、われわれは、地球を前提としない地球外生物のように地球を対象とすることはできません。自分たちのために地球を利用していることは、実は自分たちの前提をみずから変えてしまっていることになります。

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズと精神科医フレデリック・ガタリの共著「千のプラトー」は、わたしたちの思考の回路をグルッとひっくり返してさかさまに展開したような驚きの世界を見せてくれますが、その世界の中で見えてくる人間と地球の関係は、初めはたいへん奇妙なものに思えますが、それはカーソンの生物の目とよく似ていることに気がつくります。

「千のプラトー」の12番目の章では人間の技術論が展開されています。その長い議論の中に、『鉋をかける職人は木と木の繊維に随っているのである』、『職人は、必要な繊維を有する木をそれがあるところまで探しに行かなければならない』というような、職人の記述が出てきます。初めてこれらの職人に出会ったときの驚きを今も忘れません。職人を大工に置き換えれば、大工は木を探しに山へ行かなければならない、ということになります。

荒壁を塗っている現場の休憩時間に左官職人と談笑する丹呉さん。(埼玉県鴻巣市)



なぜ二人はそんなことを知っていたのだろうか。なぜなら、大工塾\*の大工の中では山に向かうという志向がたいへん強いものだったからです。伐採に何日も山へ入る大工もいたし、製材機を据えて製材までする大工もいました。木で住宅をつくろうと考えると、山や山の製材所に向かうことは必須の道のように思えたのです。なぜ大工は山へ向かうのか（この「これからのすまい」を編集する菅家さんも山へ向かった一人です）、そこには不思議な哲学が展開します。

「わたしを一つの粒子と考える」というのが、ドゥルーズとガタリの考えです。わたしを地球に棲息する一つの粒子と考えると、そこから世界を見る。すると、木もまた粒子と考えられます。地上のあらゆる生物を、それぞれ一つの粒子と考えることができます。その粒子と粒子の関係が地球の生態そのものだと考えると、その関係性には中心もなく、左右もなく、高低もありません。粒子の組み合わせと広がり運動があるだけです。

なぜ大工は山へ向かうのか。粒子を考えると答がでできます。木は動かない粒子で、人間は動ける粒子だからです。動く人間がそこまで行くのはごく当たり前のことなのです。木のところまで行く人間という構図は、カーソンが紹介した、セージブラッシュとキジオライチョウの関係と同じです。地球上の関係は、このような粒子同士の切っても切れない組み合わせの関係で成り立っているという認識は、カーソンが

見ていた自然の形です。

このように考えることを、ドゥルーズとガタリは機械状と呼びます。人間と木との間には機械状の関係が成立しているのです。その関係のなかでは、人間という粒子は、あたりまえのように木という粒子に随うしかない。これは木だけに成り立つことではなく、土や石と人間との間にも同じように成立するものです。そのような関係はずっと続いてきたもので、その長い継続を機械状系統流と呼びます。

『機械状系統流とは、人間と自然の統一体であり、さまざまな時代、さまざまな文化のアレンジメントのあいだの遠い距離を超えるものである』

『職人は物質の流れすなわち機械状系統流に随うように定められたものとして定義できるであろう』

二人の哲学は、さらに遠いところまで進みますが、とりあえず木と人間との関係性を機械状にとらえて、その継続を機械状系統流とよび、大工とはその系統流のなかで木に随ってつくると考えたところで、木造住宅を作ることを考えてみます。

「千のプラトー」  
ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ  
1980年 河出文庫

※大工技術を学ぶ場ではなく、大工として今何を考えるべきかを、皆で学ぼうとする場として、丹呉さんを中心に1998年から活動している会。  
<http://daiku-j.net/index.html>



天然乾燥をするために積み重ねられた材木。割れ、反り、ねじれ、収縮。木の厄介さを受け入れながら使う天然乾燥材は、「木にしたがう」ことなしには扱えない。（埼玉県飯能市 大河原木材貯木場）



渡り<sup>あこ</sup>腰構法でつくられた軸組み。鉛直荷重の伝達に安心感のある渡り腰構法は、「木にしたがう」構造システムを志向する。(埼玉県比企郡小川町)

### (三) 機械状の住宅づくり

機械状系統流のなかの職人＝大工は、伝統技術を受け継ぐひと、というイメージではありません。機械状であるということは、ただひたすら木に随って作ることであり、そのための道具をつくり、そのための技術体系をつくり、そのための他の職人との連携をつくることです。その技術はつねに時代や社会の形態によって改訂され、新しい環境（アレンジメント）に应答していくもので、技術の保存とは無縁です。木と自分との一体の関係性の実践にのみ関わるものです。

木造住宅のなかで、このような機械状系統流を先に進めることこそ、カーソンが考えた「別の道」ではないのだろうか。

カーソンが高速道路を行くようにと譬えたのは、もともと機械状である関係性を、一方的に人間だけの利益のみを獲得できるように変換した（変換できたと思えた）技術のことです。より効率よく、より早く、より利益が生じるように、より高速で進むこと、これらの技術が人間以外の生物の役に立つことはありません。ただ、ただ人間だけに利益をもたらす技術。60年前のカーソンの告発は、ここにあったのです。現在、環境問題として取り上げられているものは、人間が地球上の粒子であることを忘れた行動から生じたものです。その原因と結果を取り違えて、そこから生じた不都合を自然環境の変化ととらえて、それが人間の生存

を脅かしつつあると問題にしているものです。その危機意識は、さらに新しい技術を開発して少しでも危機を先送りしようとしています、高速道路を走り続けることに変わりはなく、そこには降りるという選択はありません。カーソンに見えていたその先の禍とは、人間の文明によって地上に生存できなくなった生物の被った禍のことです。高速道路を降りて別の道を行かなくては、人間も地上の粒子である以上、同じ禍を受けるのだと。

地球上における木と人間との機械状の関係、その継続＝機械状系統流、機械状系統流に随う職人という視点のなかで住宅をつくることを考える、これ

は高速道路を降りる方法の一つではないのだろうか。

人間という生物が地球で暮らすための「すまい」としての住宅、その住宅を地球との機械状の関係の中で考えていく、その住宅をつくるための技術、そのための生産の仕組み、それらの日々の実践、これが、あまり「ひとと行かない」が、最後の唯一のチャンスをもたらす「別の道」ではないかと私には思えます。☺

丹呉 明恭 (たんご あきやす)  
丹呉明恭建築設計事務所  
埼玉県狭山市  
<http://www.tango-archi.net/>



製図板、T定規、勾配定規、文鎮、さし矩、芯研ぎ器、コンパス、などなど。図面を描く道具が並ぶ丹呉さんの机。(埼玉県狭山市 写真：丹呉明恭建築設計事務所)

## 編集後記

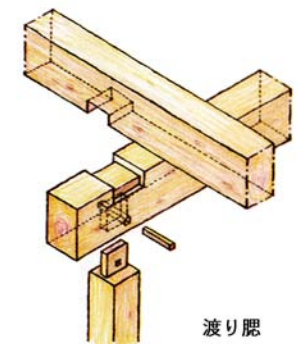
木にしたがわず、地球にしたがわず、人間の利益を獲得するためだけに積み重ねられた技術。新しい技術もその延長線上にあるのならば、私たちがかかえる家づくりの問題を根本的に解決することはできないのではないかと。そう丹呉さんは問いかけます。そこには、自分たちのやっていることや求めることは変えずに、最新式の設備を満載して脱炭素住宅を目指すような方向性とは全く異なる思考があります。

人間という生物が地球で暮らすための「すまい」をどうつくり、どう使っていくのか。それを考えるために独特の哲学用語が用いられていますが、「粒子」や「機械状」といった無機的な響きの言葉も、ダイナミックな生物の世界を伝えるカーソンの言葉とともに語られると、どこか汎生命観の様相を帯び、躍動感のある生き生きとした言葉に感じられるのが面白いと思います。このことは、「木の声を聴く」とか「木と対話する」といった言葉が表現する世界観ともつながります。

すこし話は逸れますが、生物の世界では、どちらか一方の理由だけで何かが起きているわけではありません。たとえば、病気になるのも病原菌がいるから必ずなるわけではなく、病原菌がいる一方で、その体自体に拮抗を破る何かがあるから病気になるわけです。このダイナミックな関係性に目を向けず、

病気になると病原菌のせいばかりにして自らを省みない人間は、いつしか生物の世界の住人であることを忘れてしまったかのようなのです。

閑話休題。今号は大工塾の中心的存在である丹呉明恭さんに寄稿していただきました。私にとって、丹呉さんと山辺豊彦さんの共著『渡り腰構法の住宅のつくり方』(建築技術)を読んだのが最初の出会いです、この本は渡り腰構法の設計法の手引きであるだけでなく、家づくりがかかえるゴミ問題への解答として、さらには、地球に住む人間がどのようにすまいをつくれれば良いのかという問いへの解答として、渡り腰構法が語られていることに多くの示唆を受けました。この冊子を読んで興味を持たれた方にはご一読をお薦めします。大切な夏休みを原稿執筆のためにあててくださった丹呉さん、ありがとうございました。☺



出典：『伏図・輪相図作成法と納まり』丹呉明恭+山辺豊彦著